
マクロスF 二次創作(ランカ×シェリル百合)短編集

佐川れお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マクロスF 二次創作（ランカ×シエリル百合）短編集

【Nコード】

N9655G

【作者名】

佐川れお

【あらすじ】

短編SSを1つにまとめたものです。内容は2人の日常を舞台にしたラブコメ。ギャグあり、シリアスあり。各話は単独で完結しており、話は繋がっていません。ランシエリorシエリランのどちらかです。既に両思いみたいなネタばかりです。他の場所に投稿したものに若干修正を加えたもので本人です。今後新たに話が思い浮かんだら追加しますが、とりあえず完結扱いにしておきます。

お疲れシェリル

「ただいまぁー」

ドアが開く音と共にシェリルが仕事から帰ってきた。

「シェリルさん、お帰りなさい！」

ランカは声に反応しすぐにシェリルの待つ玄関まで飛び出してきた。最近仕事でもなかなか一緒にいられずにいた寂しさの反動もありランカは駆け寄り、シェリルに抱きつこうとして固まる。

「シ、シェリルさん……?」

ランカが呼び掛けてもシェリルは全く動かないどころか徐々にランカの身体に寄りかかってきた。

「ええっ！ シェリルさん。そんな、嬉しいけどこんな玄関でなんてっ。えーと続きはベッドの上でっ！」

慌て過ぎて一人相撲を取り始めたランカだったが、寄りかかった状態のまま動かないシェリルにようやく気付いて顔を近付ける。

(寝てる……)

よく見るとシェリルは規則的な寝息をたてている。ランカの発言にも全く気付いていないようだ。勘違いで先ほど口走った自分の言葉を思いだし一人赤面してしまうランカだった。

しかし重い……

女性とはいえ意識がない人を支えるには小柄なランカでは厳しい。シェリルに押し潰されかけていたランカは、どうにかシェリルを起こさないようにと気を配りつつ下敷きになっていた場所から抜け出した。

「シェリルさん、起きてください！ ベッドまででいいですから頑張ってください！」

「う、ん。ランカ、ちゃん……」

ランカはシェリルに声をかけてみるが、シェリルからはぼんやりしたあやふやな答えが返ってくるだけだ。

仕方ない。

ランカは起こすのを諦め、肩を貸して引きずるようにしてどうにかシェリルをベッドまで運んだ。

「ん、ランカちゃん……」

寝ぼけつつもランカの名前を呼んでくれるシェリルにランカは鼓動が早くなる。

「むー、そんな無防備な姿していると襲っちゃいますよ？」

シェリルが帰ってきたら何を話そうか何をしようかといったことをずっと指折り数えながら楽しみにしていたランカにとって、ようやく会えたシェリルが全く相手をしてくれない状態なことに落ち込んで寂しく感じていたこともあり、勇気を出して寝ているシェリルに近づいていく。

ふざけた言い方をしていても胸の鼓動の高鳴りは止まらない。

2人の唇が触れ合う直前

「ん、ん……」

寝返りをうつつシェリルに我に返ったランカはシェリルから慌てて離れた。

仕事で疲れてたんだなあ、でもちゃんと私のところに帰ってきてくれて安心して眠ってくれている。

願わくは彼女が落ち着ける場所は今後もずっと私の隣だといいな、とランカは思いつつシェリルの額に唇を落とした。

「明日は2人とも久々のオフだし1日付き合ってもらいますからね！ シェリルさん！」

シェリル・ノームの悩み

最近シェリルさんの様子がおかしい。

シェリルはランカには気取られないようにしているようであるが、時折漏れるため息がそれを如実に物語っている。

（シェリルさん、どうしたんだろう……。はっ、もしか本当は美味しくない？）

今日もランカが作った食事を食べつつ

「今日も美味しいわ」

とにこやかに笑いかけてくれるがどこか陰りがある。それはランカが不安に思っているが故の思い込みだろうか。

でもシェリルに問いかけてもきつと答えは返ってこないだろう。

「はあ〜っ」

一方シェリル・ノームも1人悩んでいた。

「これは…！ やはりどうにかしなくてはならないわね」
ぶつぶつと独り言を唱えつつ、シェリルはお風呂場で何かを決意する。ランカがぐるぐるシェリルのことを考えていることに気付くことが出来る余裕も失っていた。

翌朝。まだ陽も当たらないような時間。

ランカはまだろみながらも隣からこそこそ音がしているのを耳にしたような感覚にとらわれた。しかし疑問符を浮かべつつも寝ぼけた頭ではあまり深く考えられず、再びそのまま眠りに落ちた。

「んーっ！ シェリルさんおはようございますー！」

隣でまだ寝ているはずの人を起こして挨拶をしようと、伸びをしつ

つ振り返ったランカはそこで固まってしまった。そこには誰かがいた形跡はあるものの既にもぬけの殻だった。

(シエリルさんの寝顔を見ようとしたのにくって違う！)
頭を振り妄想を振り払う。

暖かい。

ランカがベッドを確認するとまだ微かにシエリルが先程までいたであろう温もりが残っていた。

(どこに行っちゃったんだろう……)

急に不安にかられ胸が押し潰されそうになる。

ランカが泣きそうになっていると、計ったかのような絶妙のタイミングで玄關の扉が開きシエリルが戻ってきた。

「ふうー、ただいま」

まだランカが寝ているかと思っているのか静かに告げる。

「シエリルさん！ 置いて行かないでくださいっ！」

「ええっ、ど、どうしたの？ ランカちゃん。私はどこにも行かないわよ」

ランカに急に飛び付かれ泣かれてしまい訳が分からずとまどうシエリルだったが、ランカを胸に抱きしめ泣き止むまで頭を撫で続けた。

「落ち着いた？ でも急にどうしたの？」

「うう……シ、シエリルさんがっ私を置いていなくなっちゃうと思っつてっ」

何故そんなことを思ったのだろう。逆はあっても私がランカちゃんから離れることなんてありえないのに。でもランカを不安にさせてしまったことは確かなようだ。

「そんなことないわよ。ずっとランカちゃんの傍にいるわ」

「ほ、ほんとですかー」

まだ落ち着かないのか舌足らずになっているランカを宥めつつ疑問に思っていたことを尋ねる。

「でもどうしてそんなことを？」

「シェリルさんが最近何か悩んでいるようだったから。私に不満があるのかな、って思ってた…それで今朝起きたらシェリルさんがいなくなってたし」

気付かせないように注意をしていたつもりだったが、この娘はしっかり気付いていたようだ。ランカの観察力に感心すると共に、自分のことをしっかりと見ていてくれたことにシェリルはじんわりと胸の奥が芯から温かくなるのを感じた。

「心配かけてしまつてごめんなさい。でもなんでもないのよ」

詫びつつも肝心の理由を告げず曖昧にごまかそうとするシェリルに対しランカは追及の手を緩めない。

「じゃあ今どこに行つてたんですか！」

また少し涙目になりつつもランカが尋ねると、ランカの泣き顔に弱いシェリルは顔を赤らめつつも渋々白状した。

「……ランカちゃんのお食事が美味し過ぎてちよつと太っちゃったから。ダイエツトしようと思つてジヨギングに行つてたのよ」

ランカは気が動転していて気付かなかつたが、言われてシェリルがジャージでタオルを肩にかけた姿だったことによろやく気付いた。

「なんだ……」

気が抜けて崩れ落ちそうになるランカをシェリルが慌てて腰から支える。

「ちよつ、ランカちゃん大丈夫？ しつかりして！」

しばらくしてようやく立ち直つたランカはシェリルに尋ねた。

「でもシェリルさん全然見た目変わってないじゃないですか。いつ

も通りきれいで私の憧れの人ですよ」

「駄目よ！ 私達は人に見られる職業なのよ。歌手であつても常に外見も磨かなくてはならないのよ」

素直に感情をぶつけてくれるランカに照れながらもシエリルは強く言い切る。

そして意識しなければ聞き逃してしまうような小声でつけ足した。

「……それにランカちゃんにいつもきれいだと思つていてもらいたいから」

「えっ、シエリルさん今何か言いました？」

「な、なんでもないわっ！」

そう慌てるシエリルをニコニコ眺めながらランカはいたずらっぽくこつ言つた。

「じゃあ明日からは私も一緒に走らせてください。私もシエリルさんにきれいだと思つていてもらえるよう外見を磨きます！」

「な、本当はランカちゃん。さっきの聞こえてたんでしょ？」

ランカにからかわれたと気付いたシエリルは赤面しつつ、この娘には一生かなわないなあと思うのだった。『銀河の妖精』も形無しである。

翌朝

2人仲良くジヨギングをして帰つてきたのはいいのだが……

「こ、これは一体……」

食卓に大量に並んでいる黄色の物体。まさか……？

「ランカちゃん。これは？」

恐る恐る尋ねるシエリルに対し、満面の笑みを浮かべつつ答えるランカ。

「え、シエリルさん知らないんですか？ バナ ダイ ットですよ

！ とある大物歌手の方がやって効果があつたそうなんです」

（大物歌手って誰！？）
と思いつつ笑顔でランカにバナナを差し出されると断れないシェリルであった。

結局それからどこで聞き付けたのか皆からも楽屋にまでバナナが届けられてしまいシェリルは約1ヶ月バナナ漬けの生活を余儀なくされたのだった。

でも日頃バナナ尽くしだった為に、ランカの料理が一層美味しく感じられたのも事実だったり。

シェリル・ノームの悩み（後書き）

2本目。オチは元ネタの人のエピソードを参考にしました。
こっちに来てから運動不足というシェリルのブログ記事を読んでこ
んなことがあってもいいかなーと妄想してみました。

ある日の楽屋

「暇ねえ……」

本日撮影のスケジュールが急遽変更されてしまい次の仕事まで時間が空いてしまった。

シエリルも以前だったらスタッフに我侭を通して強行させたかもしれないが、今は違う。

運良くランカも一緒の仕事だったので楽屋で待機中の今は二人で雑談に興じているところだ。

「んー、そうだなあ…… あ、じゃあトランプやりませんか？ シエリルさん」

シエリルのぼやきを聞いてからしばし逡巡していたようだが、何かを思い付いたのかランカは笑顔で提案してくる。

「トランプう？」

「はい！ ババ抜きなんてどうでしょう？」

二人でババ抜き。

何故にトランプ？それにババ抜きだとジョーカーを誰が持つてるか分かってしまうし、あまり意味がないのでは……

シエリルは内心そう思いながらも、ランカがあまりに無邪気な笑顔だったのでつられて首を縦に振ってしまった。

既にランカはどこから取り出したのかトランプを配り始めている。もしや普段から持ち歩いているのだろうか。

そんなことをシエリルがぼんやりと考えている内に、カードを配り終えたらしい。

「じゃあ始めましょう！ あ、それでもし私が勝ったらシエリルさんが私のお願いを一つ聞いてくれるってのはどうですか？」

「お願い？ 何かしら。じゃあ私が勝つたらもちろんランカちゃん
が私の願いを叶えてくれるってことよね」

「もちろんです！」

ランカには自分が負けるという可能性は毛頭ないらしい。得意気な
表情でシエリルの要求にも二つ返事で了承した。

シエリルはランカからの思いがけない提案に軽く驚きつつも、面白
い展開になってきたことでババ抜きにも俄然やる気が湧いてきてい
た。

「はい、上がり〜。また私の勝ちね」

からかうようなシエリルの声が室内に響く。

開始当初は得意気で雑談混じりだったランカだったが、口数も徐々
に減っていき真剣さが増し、戸惑いと焦りの表情も見えてきた。

「そんなあー！ー！」

ランカはもう何度目かも分からなくなってしまうた悲鳴を上げて、
最後に残った一枚のカードを手に持ったままテーブルに突っ伏した。
またジョーカーが最後まで手元に残ってしまった。ランカの負けで
ある。何故かシエリルが一度もジョーカーを取ってくれない。

皆から表情がころころ変わって考えてることがすぐ分かると言われ
るから、必死にポーカーフェイスの練習をしたのに！

「なんで勝てないのー！ シエリルさん、もう一回やってください
！」

「また？ 構わないけれども。貴女は私には勝てないと思うわよ？」
シエリルは勝者の余裕なのか、勝ち誇った笑みを浮かべつつ答える。
確かに先ほどから全く勝てそうにない。ゲームを始めた時は普通な
のに、カードの枚数が少なくなってくるとことごとくジョーカーを
避けられてしまう。なぜだろう……？

頭に疑問が湧いてくるがランカにはどうしても理由が分からない。

（私達は感覚を少し共有するようになったから？と聞いてもカード

までは分からないだろうだし…… は、シェリルさんはもしかやエスパー！？)

おかしな方向に思考が飛んでいるランカを眺めているシェリルは一方でこんなことを考えていた。

(ランカちゃん見てると面白いわねー。本当かわいい)

なぜランカは勝てないのか。シェリルがジョーカーを一度も引かない理由はここにあった。

ランカ自身はポーカーフェイスを装っているつもりのようにだが、シェリルがジョーカーらしきカードを選んでしまいそうになると、余程嬉しいのか緑色の髪が跳ね上がるのだ。

それを見て隣のカードに手を移し、軽く引くような素振りをしてみると、髪がおれるように元通りになる。

(ランカちゃんはまだ気付いていないようだし、かわいそうだけどこのことは絶対内緒ね)

ランカの犬のような素直さに頬が緩みそうになっているシェリルだが、ランカに何を要求しようかと頭を巡らせる。

「さーて、負けたランカちゃんには何をしてもらおうかな」

「うっ……」

結局ババ抜きはシェリルの十六勝0敗という結果に終わった。二人だったので時間がかからず早かったとはいえ、もちろんその間にかなり時計の針は進んでいた。

余程勝ちたかったのかランカは何度も挑戦したし、シェリルもランカの姿を見るのが楽しくて対戦に応じていた。

「分かりました……約束ですから、つてわわっ」

「あら、何でもしていいのよね？」

臥せていたランカが気付かない内にシェリルはランカの背後に回り、抱きしめてランカの髪に顔を埋めながら耳元に息をふきかけ囁いた。

「何でも、つて。それはまあ言いましたけど……」

抱きしめられたランカは耳まで真っ赤に染まって眩くが、徐々に小
声になり語尾が消えていく。心なしか体温も上がっているようだ。

「なあに、何を想像したの？」

「な、なにも想像してません！」

「んっ、んうっ」

慌てふためくランカをどこか悪戯めいた顔で眺め、シエリルは抱き
しめた状態のまま左手だけで素早く顔だけ振り向かせ唇を奪う。テ
ーブルから落ちた幾枚かのカードが床を滑る。

「ん……ふう。ランカちゃんは本当に可愛いわねー。これ以上は我
慢出来なくなりそうだから続きは後でね」

「はぁっ……え、続きつて」

「あら？ 当然勝った回数分、私の言うことを聞いてくれるのよね」

「ええっ！……わ、分かりました。」

シエリルは真っ赤になりながらも頷くランカを抱きしめたまま囁く。

ランカにとってはシエリルの言葉こそが『ジョーカー（切り札）』
なのかもしれない。

こうして二人きりのつかの間の休息時間は過ぎていったのだった。

ある日の楽屋（後書き）

ネタをお借りして膨らませてみました。

迷子（前書き）

オリキャラ注意。

モブ程度ですのでオリキャラが大活躍！みたいな話ではないですが、例のごとくランシエリです。久々に書いてみました。

迷子

ある日の午後。

次の仕事まで時間はあるしと楽屋でのんびり寛いでいたシェリルさんと私。

最近は一緒にやる仕事が多くてプライベート以外でもシェリルさんに頻繁に会えて幸せだなあーとしみじみ思う。

しかしそんな静寂を打ち破るような音が外から聞こえた。

「ん？ 何か外で声がしない？」

シェリルさんのその声に呼応して、私も意識を楽屋のドアにやると確かに楽屋の外がにわか騒がしい気がする。

「まさかトラブルじゃないでしょうね……？」

「どうなんでしょう？」

恐る恐る私達がドアを開けると、そこには心配していたような仕事関係のトラブルではなかったけれども私達二人にとってはある意味トラブルかもしれない出来事が待っていた。

「うう、ママあ……どー……」

3歳ぐらいかな？

うさぎのぬいぐるみを脇に抱えた小さな女の子が、ここにはいない母親の名前を呼びつつ泣いていた。

誰かスタッフは！？

周囲を見渡してみるものの、皆遠くで慌ただしく駆け回っているよ
うで、泣いている子供に気付く余裕もないみたい。

べー……

まさか泣いている子供を放っておくわけにもいかない。

「ママとはぐれちゃったの？ お姉ちゃん達がママを見つけてあげるから大丈夫だよ。とりあえず中に入ってお話聞かせてくれる？」
「つく。うん…」

私が女の子の目線と同じ高さになるようにしゃがんでゆっくり尋ねると、女の子はまだ泣いているもののコクリと小さく頷いてくれた。呆然としていたシエリルさんも、楽屋に入ってようやく我に返ったのか落ち着いてくれて一安心。私一人ではやはり不安だし。

しかし楽屋で椅子に座らせて女の子を落ち着かせようとしてみるもなかなか泣き止んでくれず、何を尋ねても要領を得られない女の子に私は途方に暮れていた。

困り果てて私まで泣きたくなってくる。

そんな中で今まで黙っていたシエリルさんが発した言葉は絶大な効果を発揮した。

「いい、よく聞きなさい。女の子の涙はね。ここぞという時までとっておくよ。だから今は泣いちゃ駄目」

「ちよっ！ 子供に何を吹き込んでいますか、シエリルさん！」
「あら？ 本当のことでしょう？ 普段泣く姿を見せないからこそ、大事な時に効くのよ」

確かにシエリルさんの言う通りかもしれないけれど……
こんな小さな女の子にそんなことを言っても理解出来ないと思う。しかしシエリルさんの悪戯めいてはいるものの優しげな表情に何かを感じ取ったのか？

女の子がピタリと泣き止んでくれて私は驚きつつ、将来周りの男の子が振り回されそうだなあと遠い未来の心配を少ししてしまった。

でもまあとにかくシエリルさんのお陰で？泣き止んでくれたからよ
うやく話が出る。

「で、あなたのお名前は？」

「リ、リイン……」

「リインちゃんかー。ママのお名前分かる？ どんなお仕事して
るか。」

「わかんない……いつもはおうちでおるすばんなの。でもママにつ
れてきてもらって」

「そっかー。じゃあスタッフさんか出演者の人なのかなあ。何か目
印みたいなのあるかな……」

先ほどから私達の会話を横から口を挟まずに聞いていたシエリルさ
んがどこかに電話をかけた始めた。恐らくスタッフさんに迷子を探し
ている母親がいないか尋ねてもらっているのだと思う。

あまり動くともた分らなくなってしまっし、ここにいたほうが
いい。

また少し不安になったのかぎゅっとリインちゃんがうさぎのぬいぐ
るみを抱きしめた。

そういえばずっと脇に抱えていたんだった。

「可愛いうさぎさんだねー。仲良しなの？」

私が尋ねると少し元気になったのか

「うん！ おともだちのカレンちゃん！ いつもいっしょなの！

おねーちゃんたちもおともだち？」

さすが小さな子。ころころ表情が変わって面白いなあ。

そんなことを思いながら私が答えようとすることを遮るように、背中
に何かを押しつけられた。柔らかい物を感じる。

「うーん？ お友達というよりも恋び、むーっ」

いつの間にか電話を終えていたのか、シエリルさんが私の背後から抱

きついできて爆弾発言をしそうになっている。

私は慌ててシェリルさんの口を手で押さえつつ

「あ、あははっ……何でもないよ。気にしないで!」

私達のやりとりに不思議そうな顔をしているリンちゃんに対して軽くごまかす。

「ちょっとシェリルさん。子供相手とはいえ何言い出すんですか」

「何って本当のことに決まってるじゃない。私がランカちゃんを愛してるのは事実なんだ

し。これって友達とは違うでしょう?」

「なっ、そ、それは私もそうですけど……」

小声でシェリルさんに注意するも、ストレートにこう返されては何も言えなくなってしまう。

真顔で言うのは反則だと思っ……

私がシェリルさんのこの表情には弱いのを知っててやるんだから。まあいつでも弱いんだけど。

「おねーちゃん、おかおあかいよー。どうしたの?」

そんなことを考えていたせいか脳内は別の世界に旅立とうとしていたらしくリンちゃんの私を呼ぶ声にふと我に返った。

「え、うそ!?! 気のせい気のせい。 ああえっと、そうだ!なんかここの部屋が暑くてねー」

「そうそう、『あつい』からねー。いろいろと」

慌てる私を見てにやにやしなから合わせてくれるシェリルさん。絶対わざとだ……

そんなこんなでぬいぐるみのカレンちゃんも交えて4人?で賑やかに過ごしていたら

ドアをノックする音が聞こえた。

「あ、ママが来てくれたのかな？ はい、どうぞー」
私の言葉に瞬時に反応してドアに駆け寄るリンちゃん。
開いた扉から若い女性が入ってくる。恐らく20代半ばぐらいだろ
う。

「ママー！」

「リン！無事で良かった！ママが目を離しちゃってごめんね」
勢いよく飛び込んだリンちゃんを優しく抱き止めるリンちゃん
のお母さん。

後から聞いた話によると他の出演者の方のスタイリストさんだった
ようで、いつもリンちゃんを預かってきている人が今日に限っ
て都合が悪く、仕方なく仕事場に連れてきたものの仕事が忙しく少
し目を離れた隙に、リンちゃんはどこかにいなくなってしまうた
とのこと。

「すみません！うちの子がご迷惑をおかけしたようで。ランカさん
とシエリルさんのお手
を煩わしてしまい、本当に申し訳ございません！ありがとうございます！
ますー！」

私達が芸能人というのもあるのだろう。
平身低頭のお母さんになんだかこちらまで恐縮してしまう。

なんだか照れますね。

そうシエリルさんに言おうとして隣にいたシエリルさんの横顔をふ
と見ると

リンちゃんに対して頭を撫でながら慈しむような表情で

「ママに会えてよかったわね」

と話しかけているのだけれども、その姿がどこか寂しげに見えたの
は私の気のせいだろう

か。

私も親はもういないけれども、優しいお兄ちゃん達がいる。でもシェリルさんには保護者代わりだったグレイスさんも今はいないし身よりがないんだ。

そのことを忘れていたわけではないけれど、普段はあまり考えていなかったことを改めて意識して複雑な気持ちになる。

「おねーちゃんたちありがとうー！ またねー」

「さーて、そろそろ仕事の時間ね。今日も残りを頑張りますか〜」
リンちゃん母娘と別れの挨拶を済ませてひらひらと手を振っていたけれど、一転して無理に明るく振る舞っているかのようなシェリルさんの態度がどこか気になって。
なんだかリンちゃんよりもシェリルさんが迷子のように見えてしまふ。

シェリルさんの背中が遠ざかっていく。

どこかへ行ってしまう。

やだ！ 行っちゃいやだ！

そんな錯覚を起こした私は無意識にシェリルさんの手を掴んでいた。

「ランカちゃん……？」

「私じゃシェリルさんの家族にはなれませんか？」

どこか泣き出しそうになっていた気持ちが表に出ていたのか、歩きだそうとしていたシェリルさんも私のほうに向き直ってくれた。

「急にどうしたの？」

「えっと、うまく言えないんですけど。今この手を離したらシェリルさんが遠くに行ってしまう。何言ってるんだろうって思われるかもしれないませんが、そんな気がしたんです」

なかなか上手く気持ちを言葉で伝えられないことがもどかしい。自分でも支離滅裂になってると思う。

でもシェリルさんは私の頭を優しく撫でながら、ゆっくり私が言い終わるのを待っていてくれた。

「……そんなことないわよ。でもそれってプロポーズ？」

「な、そ、そんなつもりじゃっ！」

「えー、違うのー？ ショッカー」

「う、いや。違うというかなんというか……うう、違わないです」わざと大げさに肩を落として落ち込むシェリルさんに釣られて、何か重要なことを言ってしまったような気がする。

「あはは、もう冗談よ！ 本当にランカちゃんも可愛いわね」

「もうシェリルさん！！ 真面目に聞いてくださいよ！！」

「あはは、ごめんごめん。……でもありがとう」

それでも最後にポツリと小さく言ってくれたシェリルさんの言葉に私はようやく安心出来た。

普段私をからかってばかりでどこか捉えどころのないシェリルさんだからこそ、たまに言ってくれる真剣な言葉が本音なんだということが今の私には分かる。

大丈夫。気持ちは伝わっている。

これからも一生隣にいたいし、たとえシェリルさんが嫌って言うても絶対離れないですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9655g/>

マクロスF 二次創作(ランカ×シェリル百合)短編集

2010年10月8日22時02分発行